

## 目師会の意義と回向の大事

本日の御報恩御講はは目師会としても奉修させて頂きました。

日目上人は、身延山において日興上人には無論のこと、大師匠の日蓮大聖人にもご入滅の日まで常随給仕し、大聖人から甚深の法義を授けられました。弘安5年10月、大聖人がご入滅された後も、常に2祖日興上人に仕え、日興上人が正応2年（1289年）謗法の山となった身延山を離れ、富士上野に移られるに当っては、その片腕として大いに日興上人を助けました。

日目上人がなされた公家、武家への数々の国諫は、大聖人、日興上人の志を奉じ、じつに勇猛果敢にして、その生涯をかけての闘いでした。この日目上人の身命をなげうって広宣流布（こうせんるふ）に努められたご精神は、永遠に受け継いでいかねばなりません。本宗においては、法のため、国のため、一切衆生救済のため老体をもかえりみないこの不惜身命の尊い行体を鑑とし、ご報恩の法要を真心をもって奉修しているのです。

総本山では11月15日は勿論のこと、毎月15日にも御影堂（みえいどう）において法主上人ご出仕のもと、日目上人ご報恩の法要がおこなわれています。

御歴代上人の法要は御報恩謝徳の為に奉修しますが、一般の人に対しては回向の為に法要を執り行います。

「回向」とは、自らが修めた善根を他のためにふり向けることであり、私達の善根が御本尊の大きな仏力・法力により仏界を現じ、亡くなった方々へ届くのであります。日蓮大聖人は『御義口伝』に、

**今日蓮等の類聖霊を訪ふ時、法華経を読誦し、南無妙法蓮華経と唱へ奉る時、題目の光無間に至って即身成仏せしむ。廻向の文此より事起こるなり。（御書1724頁）**

と、亡き精霊を即身成仏せしめる「回向」は、下種妙法の信心修行にあることを御教示されています。

私達の信行の功德、追善供養が時空を越えて精霊に届く故に、真の回向となる事を忘れてはなりません。つまり、私達が祖先や亡くなった方々に対しての知恩報恩の精神を固く持ち、本門の本尊を信じて、お題目を唱えていくところに正しい「回向」となるのであります。

ご存知の通り、仏法では因果・因縁を説いております。親子となることも夫婦や兄弟となることも、ただの偶然ではなく、過去からの深い因縁によるものなのであります。日蓮大聖人は、『孟蘭盆御書』に

**自身仏にならずしては父母をだにもすくいがたし。いわうや他人をや。しかるに目連尊者と申す人は法華経と申す経にて「正直捨方便」とて、小乗の二百五十戒立ちどころになげすて、南無妙法蓮華経と申せしかば、やがて仏になりて名号をば多摩羅跋栴檀香仏と申す。此の時こそ父母も仏になり給へ。故に法華経に云はく「我が願ひ既に満じて衆の望みも亦足りなん」云云。目連が色心は父母の遺体なり。目連が色心、仏になりしかば父母の身も又仏になりぬ。（御書1376頁）**

と仰せであり、自分自身が妙法信行の功德善根により即身成仏を遂げてこそ、私達の身心を与えてくれた父母を成仏に導く回向の道が開かれると仰せであります。

『刑部左衛門尉女房御返事』に、

**父母に御孝養の意あらん人々は法華経を贈り給ふべし。教主釈尊の父母の御孝養には法華経を贈り給ひて候。（中略）定めて過去聖霊も忽ちに六道の垢穢を離れて靈山浄土へ御参り候らん。此の法門を知識に**

## 値はせ給ひて度々きかせ給ふべし。(御書1506頁)

と御教示の如く、一切の善根の中で、父母への孝養を尽くすことが第一であり、まして末法の三大秘法の南無妙法蓮華經の孝養ですから、最高最善の孝養となるのであります。

「盂蘭盆經」には、目連尊者の母である青提女(しょうだいにょ)が、生前の慳貪の罪により、餓鬼道に墮した事が説かれています。「慳貪」とは、ひどく物惜しみすることで、自分さえ良ければいいという考えであります。食りは、まさに餓鬼道の苦しみを受ける業因であります。母である青提女を、目連は小乗教での修行によって得た自身の神通力によって、救い出そうと試みましたが果せなかったため、釈尊に教えを請うたのであります。そして目連は、釈尊の教えのままに十方の聖僧を招いて供養を行ったところ、母を一劫の間、餓鬼道から救うことができました。しかし、それでは餓鬼道の苦しみを取り除いただけであり、母を成仏の境界に安住させることは出来ず、本当の意味での救済は果たされなかったためであります。

何故、目連は母を根本的に救えなかったのか。それは、釈尊が「法華經」を説く以前であり、目連自身が未だ妙法を知らず、成仏の境界を得ていなかったからであります。その後、目連は釈尊出世の本懐である法華經八カ年の説法の会座において、小乗教の戒律を捨てて、法華經を信じ、南無妙法蓮華經と唱えて「多摩羅跋栴檀香仏」という仏になった時、母の青提女は初めて真の成仏を遂げることができたのであります。

この『盂蘭盆御書』で大事な御教示は、目連が小乗教の最高位である阿羅漢果まで登り、神通を得た力があつたとしても、その教法が誤っていたならば、決して親を救うことはできず、逆に苦しめるということであり、かつて、御隠尊日頭上人猊下は、

**結局、人間として自分自身が幸せになるということはまた、他を幸せに導いていく努力と信念のなかに存するのでありまして、特に大恩のある祖先あるいは父母等を自分の力で本当に正しく幸せにしてあげるために努力しようという、その心がそのまま信心の心であり、仏道の修行の心であるわけでございます。(中略)自分自身もその精神に則って信心修行に励んで自行化他の功德を先祖に回向し、その功德を持って御先祖を追善申し上げることが最も理想的な在り方でございます。(大日蓮469号58頁)**

と御指南されております。つまり、真の回向とは、自らが父母先祖代々の恩を知り、その恩に報いる正しい信心に立ち、まず自らが即身成仏という絶対の幸福の境涯のために仏道修行に精進し、その功德を持って亡き精霊を同じく即身成仏に導かんと追善供養に励むことでもあります。

私達は、日常の勤行の最後に「乃至法界平等利益」と御觀念致します。これと同様の意味の經文が、『法華經化城喻品第七』に、

**願わくば此の功德を以て 普く一切に及ぼし 我等と衆生と 皆共に佛道を成ぜん(法華經268頁)**

と説かれています。これは「我が願いは、妙法信受の功德善根を宇宙法界の一切衆生に平等に分け与え、我等も衆生も共々に、必ず成仏を遂げることである(取意)」との意義であります。

今、私達は2021年の宗祖日蓮大聖人御聖誕の佳節の御命題たる八十万人体勢構築に向かつて大前進する中、五濁にまみれて苦しむ衆生を救済すべく折伏弘通に立ち上がり、国土を浄化しなければなりません。私達が唱える題目は、自行化他に亘る南無妙法蓮華經であります。故に、唱題に励み折伏に邁進することが、回向の根幹であることを忘れずに、これからも一層精進致しましょう。